



針葉樹會報

通卷第六十三號

故中島嘉一郎君追悼錄「菰野菊」發行に就て

金 田 一 郎

一橋山岳部も生れてから今年で滿十五年になるそうですが、そうすると丁度中島君が部にあつて活躍したのは、その中興期にあたるわけです。全く當時の部は中島君一人によつて代表されてゐたと言つても過言ではないでせう。本科三年の夏まで部の中心となつて働いた中島君は卒業を前にして病に倒れ遂に一昨年二月二十七日没せられたのであります。針葉樹會を代表して先輩近藏恒雄氏、同期の磯野計藏氏が四日市に急行葬儀に列せられました。三月の例会には早速その事が報ぜられ直ちに追悼録を編纂して故人を偲ぶ議が起り同期の七人、磯野、宇佐美、横倉、手塚、久保田、河相及小生がその任に當る事に決しました。爾來甚だ怠慢ではありましたが、毎月會合を重ねてやつと原稿の出揃つたのが昨年の七月。それより印刷にかゝり、書肆の都合、その他編輯に不馴な事や表紙の事で大變遅れましたが幸に三回忌を前にして完成する事が出来ました。

今四日市には、中島嘉一郎君の父君も既に物故せられ母君が御令弟等と淋しく御暮らしになつて居られます。謹んで「菰野菊」の一部をお送りして故人の靈前に捧げて頂く事にしました。此の會報が諸君の手元に着く頃には慰靈祭が取行はれて墓前に供へられてゐるでせう。

去る一月の針葉樹會に一橋山岳部十五週年記念祝賀の催をする事が論ぜられましたが、その時、徒らに過去を顧みてお祭騒ぎをする事なく、むしろ將來に向つて何か残る様な記念事業を起して之に代へる様主張した私が、今此の故人の追憶を一冊の本に纏めて喜びさも悲しみもつかぬ感激に燃えてゐます。そこに少しも矛盾を認めません。若くして死んだ中島君は今後一橋山岳部が二十年三十年と歴史を古くして更に光輝を放つものと反對に次第に人々から忘れられて行くでせ

う。しかも中島君こそはその歴史の中に取落してはならぬ人です。そして二十年の祝賀、三十年の祝賀に笑顔を見せられぬ中島君です。どうか諸兄の書架に永く留めて追憶の資とされん事を望みます。

近來昭和六年卒業の我々は山に登らぬ事から針葉樹會の諸兄にお目にかゝるのが何だか恥しく感ぜられました。此の追悼集の編輯を終へて山に登ると同じ氣持を味ひました。今こそは大きな顔をして諸君に相對する事が出來ます。山の友との友情は更に此の本を通じて深まるでせう。此處に於て時日の遷延、費用の超過は問題でありません。我々の勞も亦報はれたと言ふべきです。

(磯野君令妻の葬儀に列する朝記す)

大阪より

松木謙三

此方へ参ります時に、針葉樹の原稿はうんと送ります、大阪針葉樹會は毎月例會を開く様にしますとお約束して参りましたが、さて來て見ますと銀行の仕事がべらぼうに忙しいので未だ一度もお便りしませんで不甲斐ない奴だと噂されてゐる事と思ひますがこれも仕事の爲ですからお許し下さい。併し針葉樹會の方は十一月十一日に第一回の會合をしまして其後毎月十一日には必ず開いてゐますから責任の半分は果たしたと思つてゐます、出席率は宜しいです、二三名の缺席がある程度です。

いくら忙しいと言つても日曜日毎に必ず歩いてゐますから御安心下さい。歩くことにはほんさに恵まれてゐます。此方に來てから雨の日以外は必ず五十嵐と二人で六甲に行つてゐます。何しろ

家から歩いて行けるのだから申分ありません。六甲と云ふのは庭の様な山です、ロックガーデンとは良く名付けました。ほんとにその通りです。今迄に先づ六甲の東側、南側は大體歩きましました。この冬の中に六甲は卒業して春からは京都、奈良の方面へ出かける計畫にして居ります。今日は五十嵐は東京側の計畫に参加するべく霧ヶ峯に行つたので一人で子供を相手に遊んでゐましたので丁度よい折と思ひまして御便り申上げてゐるわけです。何方の處へもさんと御無沙汰してゐますからこれで皆様への御便りに變へます。

大阪の連中は皆達者です。高木がお正月風邪で暫く休んだだけの様です、中島、岡田等は張り切つてゐる様です。五十嵐の處では去年の暮に女の子が生れて弘子と名付けました。

どんちゃん夜も忙しいのでなか／＼會には顔を出しません。

私は時間でも必ず顔を出してゐます。來月七日には懇親スキー行で伊吹へ行くことになつてゐます。相當に滑れるのが六七名そろつて行くのですから關西では相當目につく方と思つてゐます。扱私の家の方ですが此方は氣候が良い爲か子供はほんさに達者になつて風邪や下痢などは一寸もしません。女房も肥つて來ました。これは四月にはお産がある勢にも依ります。

此方に來て目に止つたことを二三申上げて見度いと思ひます。西宮は空氣が澄んで居る勢かお月様がほんさにはつきり見えます。五十嵐の説によりますと土地が砂なので東京の様に土が舞上ることかない爲ださうです。

女は東京と比較にならぬ程派出な着物、殊によい着物を着て居

ります。お正月等は殊に綺麗です。併し顔は餘り感心しない。品のよい顔は餘り見ません。洋装はめつたに見ませんがたまに見ても問題になりません。これは東京の方が數段進歩してゐます。女の事でお正月一番妙に感じましたのは島田を結んでゐるものは殆どありません。東京では暮からおかめもしやくしも島田になりませんが此方では一名も見ません。

次に食物の事に移ります。此方の食物は宜しいと思ひます。あぐどくなく、種類が多く、材料が豊富の様です。殊に鯛とか甘鯛とか云ふ赤身の魚が優秀です。味は關東方が何と言つても比較になりません。肉と酒は言はずもがな此方は宜しいです。何故か知りませんが肉に油があります。酒は變な料理屋で飲んでも頭に來る様の事は萬々ありません。

言葉は餘り感心しません。女の話は柔かくつてよいが男の話はいけません、殊に「あ、さようか」何て言はれると話が氣抜けしてしまひます。併し話の意味は解ります。此方の言ふことは解り難いらしい様です。家の子供は未だ大阪の言葉はおぼえませんがアクセント丈は尻上りになりました。早いものです。

最後に重ねて申し上げますが大阪針葉樹會は毎月十一日大阪如水會支部に集るのですから此方に出張の事がありましたら相可成この日に願ひます。外で食事をとる様な時でも必ず七時頃迄は如水會に居ります。

磯野夫人の追憶

孫 一

「磯野の奥さんが今朝なくなつたさうだ、今、増山君から通知を

受けましたから……」

近藤から此電話を聞いた時、私は思はずハツと息をつめた。あゝ、あの磯野華子夫人が！私にさつて忘れ難い二つの思出を残した磯野夫人が到々いけなかつたのか！追々に快方に向つたと聞いて居たのに！

× × ×

昭和九年十二月十五日、此佳日に二人は結婚したのだつた。其御目出度い席に連なつた私が家に歸るさ、

「男の子が生まれましたよ」

さういふ吉報！それが私の次男だつた。それから風邪一つ引かず健かに育つて今年で四歳になる。丸々と太つて「玉錦」と呼ばれるさ「ハイ」と答へる其子を見る毎に、

「此子は磯野君の婚禮の日に生れたんだ」

といふ思出が蘇る。其子は地上で健かに育つて居るのに、華子夫人は天國に還つてしまつた。あゝ。

昭和十年一月四日 新婚の夫妻は赤倉へスキー行にやつてきた。先着の金田夫妻、金田夫人令妹、手塚君に私を加へて、銀座スロップでのスキー練習は實に愉快だつた。まだ耕して無い深雪の斜面へ勢よく滑り降りたと思ふ途端に、「キャーッ」といふ悲鳴が聞えて華子夫人の首だけが雪の上にもがいてゐる。それを助け起す磯野君の親切さ！コーチ振りの嬉しさ！そして私は日頃の癖で、磯野夫人、金田夫人に迄、針葉樹會の諸君へかけるやうな號令をかけて、つまり夫權を超越してしまつたから、宿に歸つて夜の炬燵會議の評判の悪さつたらなかつた。到々「監督のお父さん」

さいふ綽名を頂戴してしまつた。それにも増して弱つたことは、私のスキーと磯野夫人のスキーとが殆んど全く同じだつたので、夫君達から、「孫さんのスキーは婦人用だ」さきめつけられた事だつた。私に云はせれば磯野夫人が男子用のスキーを履いて居るので、其スキーこそは芳賀が、私のために精魂こめて作つた板目と柱目の二臺のヒツコリーのうちの柱目の奴で、芳賀の店へ「婦人用スキー」を探しに行つた磯野君は、偶々其處に残つて居た其稍短か目の軽いスキーを夫人のために選んだのだ。

「私のスキーは孫さんと同じよ、だから轉んでも仕方がないわ」朗かな磯野夫人は一晚で私の呼名を覚えて、ゲレンデで敵をとつた。

五日の晩は御別れだといふので私は夫人方の御許しを得て、夫君達と久振にアルコホルに浸つた。いゝ気分になるゝ例の漫談癖が出て、大阪の映畫館では飛行機の映畫にも辯士は、

「アツチャからも飛行機や、コツチャからも飛行機や、飛行機と飛行機でや、コシナート」

てな説明をつけないとてないと言演して磯野夫人を笑ひ轉げさせた。

赤倉の純白の雪の上を、華子夫人を乗せて快走した私の片割スキーよ、お前も淋しかろ。

× × ×

昭和十二年二月六日、青山聖三一教會の禮拜堂の中に黒布に蔽はれた夫人の寫眞と、其傍に起つ見るも痛々しく憔悴した磯野君を視た時、二つの思出が嵐のやうに胸一杯にこみ上げてきた。

山詠 十四首

柿原謙一

乗鞍雜詠

信濃路を飛驒に限りて乗鞍の山の秀高く雪光る見ゆ
東の空をこぞりて朝あけの夜明けの光りさしそめにけり
窓に見る遠き山根の雪山の烟吐けるは淺間なるべし
乗鞍の頂寒し木曾駒や奥穂の岳のおほうけく見ゆ
頂の祠は雪に裡れどいや神さびぬ風強き晝

かく崇く空にそそれる甲斐駒や白根の岳は眞古けき山
榎の木を枝を打ちつゝ荒びある吹雪の小舎の黒き靜けさ
此の岳と共に生れ來し榎の木の遠久の命は絶ゆる時なし
深山木の黒木うづめて粉雪のかそかに舞ふや朝明けの尾根

野澤溫泉

久々に訪れ來し溫泉に此の年を一人こしつゝもの想ひ居り
元旦のまだきに起きて初湯あみ雜煮喰みけり友をまちつゝ
信州の山峽の溫泉に新玉の年を迎えて歌を詠みけり
久々に集ひ合せし舊き友の夜半の會話に雪の降る音す
この出で溫泉今し別れて乗鞍の音高々雪道を踏む

大瀧山より蝶ヶ岳へ

(一)

近藤生

どうも何時もそうであるが連休が近づくに落付かなくなる。自分ながら可笑しい位である。其の時「ぺんちゃん」からでも電話があつたらもう最後である、此次の連休には是非家に居て子供を相手に暮して見度いなんで事は考へた事はないが度重なる山行

には女房はもう何も云はない。いくら云つたつて無駄なんだから。此の何も云はなくなるさ云ふ奴が苦手で御座んして「今度も二日續きは山でせう」さか何んさか云つてくれれば占めたもので「あゝ體の事を考へれば止むを得まい、會社は空氣が悪いから」なんて山へでも行かなければ今にも肺病にでもなつてしまふ様な事を平氣で云ふ位の度胸はあるがそれがこちさの方から切り出すのは場合に依つては仲々事面倒である。

こんな時ぺんちゃんからでも電話が來たら愈々一大決心をせればなくなる、これでも感心な處があつて大抵誘れるさ一度は斷はる。然しぺんちゃんの誘ひの手には全く感心せずには居られない。我々お互に子供の時から隠されると見なくなるし、やらぬさ云はれば欲しくなる心理的反動作用が本能的に存在して居る。此の手で誘ふのである「君は行かなくても良いよ」さ先づ第一に云ふ。即ち「行くな」さ云ふ誘ひの一手である、何處々々へ行くが君は行かなくてもよろしいなんて云はれたらあだかも魔術師に掛つた様にふら／＼と引張り込まれてしまふ。こうなるさ眼中家もなければ女房はおろか子供もなくなる、實に恐る可きはぺんちゃん電話である。

大瀧山から蝶ヶ岳へも實に此の妖術に掛つてしまつたのである。處がたま／＼僕の會社の偉い人が神河内に見物に行き度いさ云ひ出して、僕が神河内を通過するさ聞いて連行を申出て來たので自動車賃も大分安くなるわけであるから我慢して一緒に行く事にした。

松本から自動車一臺借切つて往復十五圓さの事であつた。中ノ

湯迄であるが安いものである。僕等三人は松本から到々只乗りになつてしまつて金が餘つて困つた。こんな時に學生が居ればうんさ御馳走して淺間温泉へでも何處へでも連れて行つてやるのに、感が悪い奴ばかりで誰も一緒に來ない。そして金を持つて無い時に限つて澤山行く。どうも此點學生は餘程研究の價值があるさ考へる。我々は學生に向つて今度はどの位軍用金があるなんて事は一寸先輩の態面さして云へない。其時／＼の先輩の顔色や動作に注意して、「ハハン」さ合點して來る様にならなければいけない。

どうもこんな事を書いて居ては、何時迄たつても大瀧山小屋へは着けそうもないから、無駄書は是で中止さ致しまして、一路小屋をめがけて邁進しませうさ云つた處で物には順序さ云ふものがある。五千尺旅館から出發する事にする。當日の大目那荏原父子一行と別れて一町も行かぬ内に、足の裏に立派な堂々たる豆が出來てしまつたには閉口した。中の湯温泉から約一里半位しか歩いて無いのである、我慢して徳本峠の懐しき力餅屋の前に來るさ、人相のさても悪い人夫型の男が一人休んで居る。僕等も一本立てるさ裏から又一人現はれたのには一寸ギョツとした。二人さも相當な顔付きである。早や時計は一時過ぎであるのにまだこんな處をぶら／＼して、何時あの山の頂邊迄行けるかと考へると心細い事限りない。足の裏の豆は愈々成長して來た様であるし、奥穂高の頂邊にはさつき五千尺旅館から見た時笠雲が掛つて居たし、こりや明日は一寸荒れるわい。

向ふの方から女學生らしいのが「リヤカー」の「リヤ」だけにスキーを積んで二人してゑんやら／＼引張つて來る、何處から來

たと聞いたたら横尾から唐澤へ行つて来た云ふ。熊さんがYWC A山岳會員かと聞いた處「然り」と答へたが、何時迄相手になつ居た處で何んとも致方ないのでそこへ、一路德澤へ進む。此の德澤へ這入つてから大瀧山小屋迄の長かつた事と云つたらお話にならない。體が文字通り綿の如く疲れ日は早や傾いて足元も明きりしなくなつた頃になつても、まだ谷は遙々として續いて居て待望の急坂が現はれない。

残雪は道を蔽つて一寸休んでも寒くなる。愈々例の得意の夜歩きとなる、も、若い頃から熊べんと揃へば、決つて夜歩きになる癖になつて居るので馴れたものである。「ランタン」片手に雪の夜道を探しながら重い「リュックサック」を何度となく山側にもたせかけては休む。

静けさ寒さそして淋しさが體の眞中へ迄浸み込んで来る、見へるものは目の前の谷が一寸とお互の顔位なものである。精進に精進を重ねて「小屋迄五分」と云ふ標示を見た時には全く嬉しかつた。ほつと一息である。一寸急な雪の斜面を三人は一生懸命に登る。漸く小屋を發見して冬期入口から這り込む。荷物を入れて居ると、人夫が山の様な荷物を背負つてやつて来た、何處から来たかと聞いた處小倉から来た云ふ。お客さんが此の下ですつかりへばつてしまつて、是れから迎ひに行く云つて荷物を置いて行つてしまつた。

矢張り物好きは我々ばかりではないらしい。其の内にぺんちやんがお腹が痛むと云ひ出して寢た切り動かない。又白馬の時の様な容態であるが左程心配した事もない。其の内夫婦者が到着、へ

ばつたのは女房であつた。

人夫は二人連れて来てゐるが、あれでは二人連れて来てても人夫もゆるくない。我々は色々御馳走もあつたが、明日常念岳への縦走も考へて早目に寢る事にする、夫婦連れは新館の方へ行つた。

山岳部報告 (十二月—一月)

記 録

(1) 穂高奥又白谷(一一・二七—一二・四) 小谷部、森川

大いに張切つて出發せしも小谷部奥又白の入口にて怪我をし森川のみ前穂高に登頂す。

(2) 乗鞍岳スキー行(一二・四—六) 森川

(3) 苗場神樂峯スキー行(一二・一—三) 岩崎

(4) 槍ヶ岳(一二・一九—二五) 小林、森脇、和田

一行中二人迄身體の調子を害し自重して引返す。

(5) 北岳バットレス及北岳間ノ岳(一二・二四—一・一〇) 小谷部、森川、望月、大塚、日江井

池山釣尾根池(約二千米)に第一天幕設置(廿六日)、北岳直下二九五〇米峯に第二天幕設置(卅日)。バットレス班は二日第一尾根、五日第四尾根の積雪期初登攀に成功。三山班は廿八日北岳、二日間ノ岳に登頂す。

(6) 乗鞍岳スキー合宿(一二・二五—三〇) 柿原、森脇、鷲崎、佐々

木、岩崎、原、齋藤、里見、宮城、高橋、水田、他一般参加五名

(7) 野澤スキー行(一二・二七—三〇) 新羅

(8) 霧ヶ峯スキー行(一二・三一) 鷺崎、水田、他一名
(9) 鳥海山(一・二一八) 村尾氏、岩崎

天氣に恵まれず頂上直下にて引返す。

(10) 菅平スキー行(一・三一五) 森脇、和田

(11) 八方尾根スキー行(一・七一〇) 大塚

(12) 野澤スキー行(一・七一) 小林

(13) 藏王山スキー行(一・九一三) 岩崎

日誌

○定期部員集會 於國立部室

十二月七日 出席部員(本科六、豫科六、專門部一)

同 十四日 出席部員(本科一〇、豫科六)

此の日は冬山準備會を行ふ。

同 廿一日 出席部員(本科五、豫科七)

○冬山報告會 一月十一日 於國立部室

出席部員(本科八、豫科六、專門部一)

乗鞍岳スキー合宿(柿原)、槍ヶ岳(森脇)、八方尾根(大塚)、北

岳パットレス(小谷部、森川、望月)等の報告をなす。

○定期部員集會 於國立部室

一月十八日 出席部員(本科五、豫科三)

○卒業部員送別會 一月廿二日(金) 於吉祥寺ふみや

卒業部員(林俊介、柿原謙一、新羅二郎、松浦靜雄)

残留部員出席者十七名

○山岳寫眞展覽會 一月廿五、六日 於小平集會室

昨年秋より此冬にかけての傑作約四十點を展覽す。此度も豫科

部員諸君の努力を多とす。

○昭和十二年度當部委員左の如く決定

代表(望月達夫)、庶務(鷺崎雄四郎、大塚武)、會計(佐々木誠、齋藤明智)、記録(岩崎利一、日江井正巳)、器具(森川眞三郎)、圖書(榎本直司)

記録

○霧ヶ峰(一月十五、六日) 久保田禮治

雪質悪し。

○霧ヶ峰(一月三十一日) 中川、五十嵐、村尾、渡邊、近藤、丸

茂、増山、小柳、松浦

吉例懇親スキー行である。晴天で雪質良く、珍客五十嵐氏を加へて車山に行く。歸途上諏訪でお神酒を上げて夜行歸京。

○霧ヶ峰(二月七日) 吉澤一郎、吉澤松次郎

二人のコンビは見事に雨を誘つた。雨が止むと、今度はほんとの霧ヶ峰になる。

○藏王山(四月三、四日) 中川、村尾、近藤、増山

高湯を根據地として三日には藏王小屋附近に遊び四日は頂上に往復して夜行歸京。兩日とも降つたり止んだり、四月のスキーとしては上乘だらう。樹氷は三月中に落ちたそうだが、數日來の新雪で再び蘇つてゐた。

新入會員

林 俊介君 淺野セメント株式會社 澁谷區北谷町四九
柿原謙一君 自營 日本橋區大傳馬町二ノ四

新羅二郎君 三機工業株式會社 豐島區雜司ヶ谷六ノ一二二
松浦靜雄君 富士寫眞フィルム株式會社 澁谷區代々木富ヶ谷

一四七〇

消 息

五十嵐數馬君 別項霧ヶ峰の歸途上京。二月一日如水會館で有志の歡迎會を行ふ。

磯野計藏君 令閨を喪はる。誠に御同情に絶えない次第である。十合健二君 用事の爲上京。二月十日如水會館に於て會員有志と會し歡談す。

打橋壽郎君 横濱市中區山下町二四 互樂莊に轉居。

定例集會 一月十五日 於如水會館

出席者(會員) 中川、吉澤、村尾、久保田、金田、園山、山口高瀬、清水、増山、小柳(部員) 林、柿原、小谷部、小林、森川、望月、森脇、和田、新羅、岩崎、原、大塚、日江井、水田宮城

本年は一橋山岳部創立十五週年に當るので何か記念事業を行ふ議があり、お祭騒ぎは避け、近日針葉樹會一橋山岳部から委員を出して具體案を作り、會員全般に諮ることとなつた。

尋で冬山の報告に移り、望月君より蝮平を露营地とする白峰北岳の登攀、小谷部君からは北岳バットレスに就て述べられ、中川氏は八甲田山スキー行で長廣舌を振つた。蓋し近來稀に見る盛會であつた。

定例集會 二月十二日 於如水會館

出席者(會員) 中川、吉澤、村尾、矢作、磯野、金田、園山、

丸茂、清水、増山、打橋、小柳(部員) 林、小谷部、望月、小林故中島嘉一郎君追悼録「菰野菊」に關しては話題がはずむ。會報編輯者を交代することとし、柿原謙一君を後任にきめる。

定例集會 三月十二日 於如水會館

出席者(會員) 中川、吉澤、村尾、近藤、金田、園山、増山、小柳(部員) 林、新羅、松浦、小谷部、望月、小林
背廣の新人が現れた。例によつて例の通りに散會。

編輯後記

昨年来印刷所とゴタ／＼してゐましたが遂に換へることになりましたので、發行が二ヶ月も遅れてしまひました。何とも相済みません。平生原稿の催促が峻烈だけに冷水三斗の感があります。また別項記載の通り、次號から新會員柿原謙一君が、後任として編輯を引受けて呉れます。同君は或は直接面識のない方もあるでせうが、誌上では疾くにお馴染の事ですから、何卒私同様御後援をお願致します。顧みまするに、編輯一年間、先人山口君に依つて成された大飛躍の後を承けて、汲々努めた積りではありますが、生來魯鈍の事とてさつぱり成績擧らず、諸兄の御期待に背いた點甚だ恐縮に存じます。特に從來會報に顔を見せなかつた方々に、書いて戴かうと努めたのに、あまり効を奏しなかつたのを遺憾に思ひます。少々皮肉のやうですが、柿原君の時代になつてから、この私の希望が容れられることを期待するより外致方ありません。終に臨み、印刷屋との交渉にお骨折願つた山口君、學生諸君からの原稿集めを引受けて下さつた望月君に對して特に深甚の謝意を表します。(増山記)